

美牝上司優華の生尻

びめすじょうし

ゆうかのなまじり

By おまじりー

びめすじょうしゅうか なまじり
美牝上司優華の生尻

序章	極上女上司優華	p3
第一章	熟女のお告げ	p7
第二章	美人上司はアヌスがお好き？	p16
第三章	看護師の弾む乳房	p26
第四章	可憐O.L. 裸の下腹部	p36
第五章	制服の姦淫祭	p48
第六章	犯す！	p74
第七章	艶姿・美牝上司優華	p88
第八章	拘束恥肛責め	p92
最終章	次のお告げは？	p113

早川^{けい}慧は人一倍の女好きで、美人の匂いをおかずにご飯が食べられると豪語するが、これはどうも冗談ではないらしい。

早川の勤めるヒサミツは文具メーカーとしては中堅だが、教育育児関連の事業が堅調で、自社ビルを郊外の大規模開発都市に移した。二十一階建ての真新しいビルはワークスペースもゆつたりと、ガラス越しの午前の陽光が実に快適なのだ。

十階にある企画課では、早川が、鼻歌うたいながら、キーボードを叩いている。

早川の鼻腔を、甘い香りがくすぐった。香水やコロンではない。

（肢体からの香りだ、オレの一番好きな香り）

背後に鋭い視線を痛いほど感じる。特別魅力的で、特別危険な上司の登場だ。早川は思わず胸に手をやる。

「早川、君の脳細胞は酸欠？」

右手を腰に、左手は早川の企画書を持ち、すつくと擬音が聞こえそうな艶やかな立ち姿だ。加賀優華主任の反撃を許さない冷静なアルトボイスが早川の頭上に降り注ぐ。

「この企画書いたとき、少しはインク漏れのこと考えた？」

もう慣れっこなのか、同じブースの同僚は知らん顔だ。いや慣れっこなのは早川も一緒だった。叱責を聞き流しながら、あくまで従順を装い、優華主任を盗み見る。

豊かにウェーブした亜麻色の髪が肩にかかる。奇跡といえるほど左右の均整の取れた顔立ちだ。メイクは控えめなのにくっきりとした目元、すっと伸びた鼻梁、体力と気力が絶好調な証か。ピンと張りのある成熟した女の肌。

それだけなら、大理石の彫刻のような冷たい美人だが、知性と好奇心そして野心できらした瞳、上下ともぽってりと厚みのある紅い唇がこの完璧な美女をより魅力的な女に変えていた。

そして、何より魅力なのはバーンと張り出したバストだ。何センチあるのか、八十八、いやもつとか。見たい、見たい、主任の乳房、揉みしだき、その乳首を嘗め回したい。

ああ、それにあの腰だ、ヒップだ、ケツだ。バンと世間に遠慮会釈なく、辺りを睥睨す

る見事なお尻。西洋人でもこれほど形のいいお尻はないのではないか。下着で補正してるのか、いやいや、引き締まった肉がああシェイプを維持しているに違いない。見たい、触りたい――

優華主任の肉体のイメージは早川にとってはまさしく爆発危険物だ。残りの人生全部と引き換えに、優華を強姦しようかという妄想にふけたことも数限りない。

（言ってみろ、主任、この二本の美脚が合わさったトコになんがあるんだ。開くんだけ、開いて優華の恥ずかしい性器を全部さらけ出してみろ！）

ふとわれに帰ると、優華の目がしっかりと早川を見据えている。肉感的な紅い口唇が皮肉の笑みを作り、冷ややかにのたまう。

「いい度胸ね、見直したわ」

優華が早川のネクタイを掴むなり引き寄せる。優華の美しすぎる顔がアップになり早川は息を呑んだ。

「私の前で堂々とここをこんなにし――」

丸めた企画書で早川の股間をぐりぐりとつつく。

「あつ、こつこれは、なつ何でもありません」

優華への妄想で早川の股間はくつきちと勃起していたのだ。

「ふん。ええ見直したわよ。出来の悪いヤツから最低のヤツにね。明日までやり直しなさい――」

パカーンと思い切り、早川の頭を丸めた企画書ではたいてデスクに投げ捨て、優華主任は背筋を伸ばしてブースをさった。キュキュとひきしまったヒップから音が聞こえそうだった。

「何だよ、小学生じゃないんだからな。頭はたくなよ」

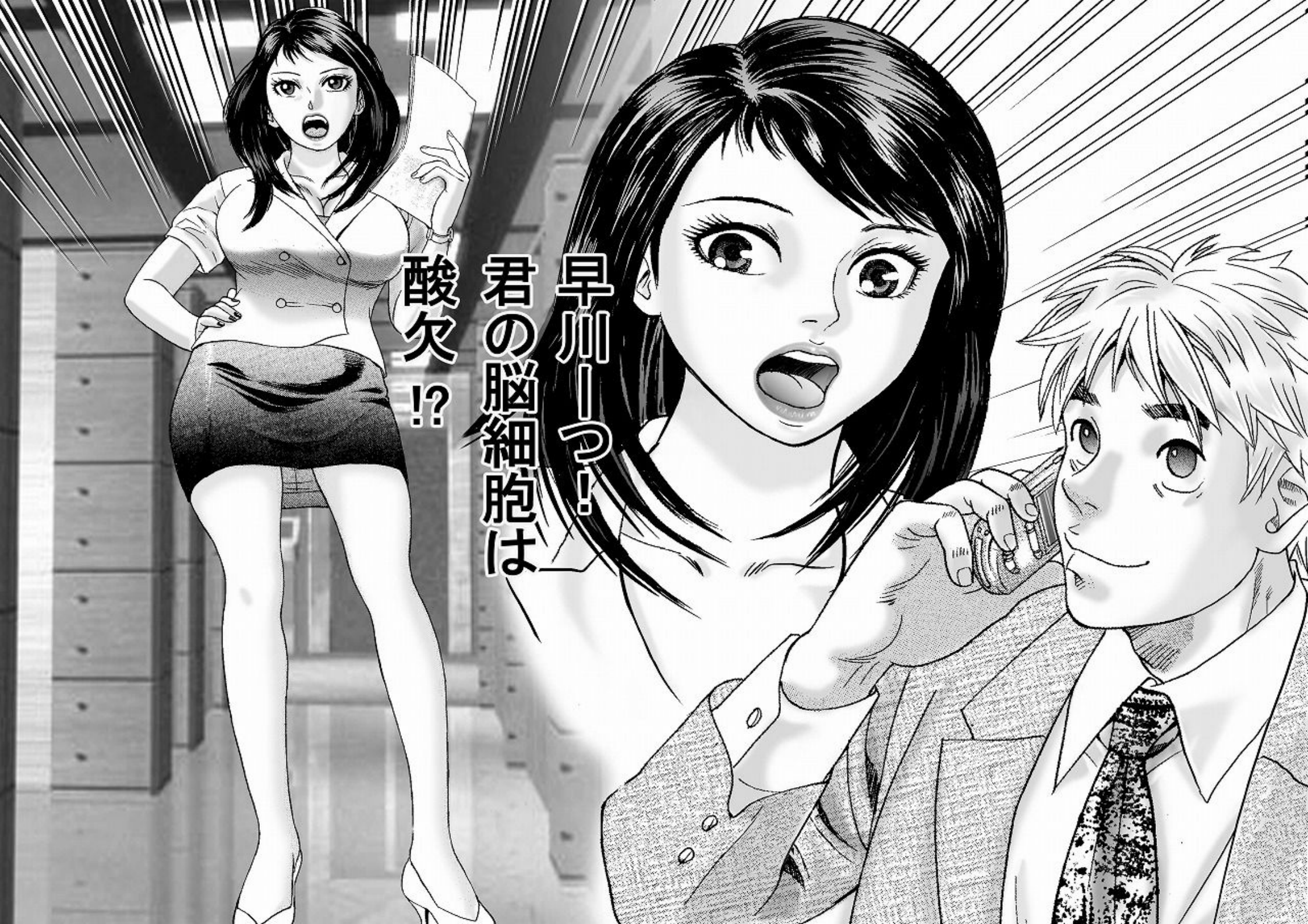
加賀優華、早川より二つ上の二十七才。企画課の中でも新規企画グループの一つを任されるだけのことはある才媛だ。美しいシルエットのパンツスーツ姿がドアに消えた。

「しかし……ええ女やゝもしあの危険物そのものの肉体をむさばることができたらもう、一年はSEン出来なくても文句はいわないよ」

先ほどから早川の股間は堅くこわばったままだ。少しも静まる気配はない。早川は熱い息を吐いた。再び胸に手をやり携帯をまさぐる。廊下に出てトイレの個室に駆け込んだ。ロックするのもどかしく、イヤフォンをはめ、携帯を操作する。

「早川、君の脳細胞は酸欠？」

冷ややかな優華主任のアルトボイスが響く。レコーダー機能を使って先ほどの優華の叱責を録音してたのだ。優華の唇が脳裏に思い出される。あの紅い優華の唇が半開きになりちらつと覗いた舌の先がのび、早川の亀頭粘膜に絡み付いていく。ゆっくりと、早川は自分



早川ーっ!
君の脳細胞は
酸欠!?

の充血した陰茎を握り締め前後にしごき始めた。
「情けないわね。早川、なにやってるの？うん？」

携帯から響く叱責の声さえ甘美に響く。

「優華とやれたら死んでもいいぜ」

2

トイレの洗面台に手をかざす。少し自分のザーメンが手にかかってしまった。早川はまじまじと鏡の中の自分の顔を見る。締りがなく頼りない顔だ。しかし、寝る女に切れ目がないのは、女体にありつくためには手間暇惜しまないその性格ともうひとつ、奇妙なお告げのおかげだと本人は思っている。

「ジャーンジャーンジャーン」

敵かに携帯から『ツアラストラかく語りき』の和音が響いた。来た！ L.L.だ。Lucy

Ladyと早川は勝手にニックネームをつけている陸名瑠璃りくなるりの着メロだ。この女の奇妙なお告げをまた聞けるかもしれない。

「慧ちゃん、星を見ない？」

正午近いというのに、まだ寝ぼけたような瑠璃の声が携帯から流れる。英語教室で知り合った、三十台半ばだろうか、暇をもてあました専業主婦だ。熟れきったところところけそうな肌の感触が甦った。

「星ですか」

早い話が瑠璃にとって早川は可愛いセックスフレンドに違いない。それは早川にとって願ってもない事には違いないのだがこの前は、みなとみらいの観覧車の中、その前は昼間、公園脇に止めた車のなかで二人きっちり絡み合ったのだ。

どうやらこの他、瑠璃は人目があるところでのセックスが好みのようなのだ。その濃い時間を思い出し、早川はそわそわと落ち着かない。

「星ってまさか、野辺山かどこかに行って夜空を見ながらですか」

「違うわよ、近くにあるでしょ星の見える場所が」

「あっ」

第一章 熟女のお告げ

1

本社移転に伴い、ヒサミツはフレックスタイムを導入していた。コアタイムを設けない柔軟なシステムで休憩時間の一時間も本人の自由裁量で配分できる。

早川はその一時間を瑠璃との密会に当てるべく、一時過ぎに会社を出て早足で大通りを西へ移動した。左右に南欧風のこじやれた店舗が並ぶ。突き当たりに九つのスクリーンを持つシネマコップレックスがあり、その愛想のない立方体の巨大な倉庫か体育館のような建造物にシネコンのシンボルマークが描かれている。そのマークの横にプラネタリウム天河のロゴが見える。

これからの一時間を想像して早川はきよろきよと周りを見わたす。会社から十分も離れていないのだ。知った顔はいなかった。

平日のこの時間でもシネコンのカウンター前は、そこそこ賑わっている。日常の風景だ。キヤラメルの甘ったるい匂いが漂うドリンクスタンドの横を通り、人気のない一角にたどり着く。

『スペースシアター天河 より美しく星の語らい ツアイス光学式惑星投影機』

と入り口にディスプレイされている。結構本格的なプラネタリウムらしいが、もとより早川は星座には何の関心もない。

気づくと携帯にメールが届いていた。「k-26」と本文にそれだけ書かれている。瑠璃からだった。もう中にいるのだ。自販機でチケットを買って早川は日常から肉欲の夜空へ踏み込んだ。

投影時間が近いようだ。直径二十メートルぐらいだろうか、円形ドームはすでに薄暗く、職員がなにやら能書きをのべている。階段のステップに席のナンバーが浮かび上がる。H…:I

…J…:

一番後ろだった。暗がりにはおっと瑠璃のクリーム色のニットが浮かび上がる。

女の右横に座ろうと腰をかがめたとたん音もなく、瑠璃の右手が早川の首を絡めとり

唇が唇に押し付けられた。

チュチュチュといばむようにソフトだが熱いキスだ。回りのことも、すでに投影が始まり

満天の星空が広がっていることも、早川は気づかない。早くも期待で熱く下半身には血が集まっているのだ。

瑠璃は肩より少し上で髪先を内にカールさせ一握みの長い前髪を左に流している。体型はふつくと、物腰はおっとりとした和風美人には違いないが、どうもつかみ所がなく、早川はいつも、顔をよく、思い出せない。

「舌を出して、慧ちゃん」

瑠璃がすでに酔ったような吐息をもらす。早川が舌を出すと唇で挟み込んで舌をすすする。唾液がじゅるじゅると音を立て吸い込まれる。たまらず早川は左手を瑠璃の肩越しに回して、ニットの肩から胸の隆起を掴んだ。(やわらけえ〜)どこもかしこも瑠璃は柔らかいのだ。たつぷりとしたボリウムの乳房を大きく揉む。闇に目が慣れて、瑠璃の白い肌に、きつと上気しているであろう頬の丸みがわかる。

右手をニットのすそから手を入れて這わせる。

(素肌かよ。スリッパ着けてないんだ)

程よく脂の乗った脇腹を撫で回して、もう辛抱たまらず、一気に右のおっぱいを掴む。案の定、ノーブラだった。

「ふふっ、ここに入る前にね、下着は全部取ってきたの……」

耳元で瑠璃が上ずった声を出す。目でその豊かなおっぱいを鑑賞できない分、早川は指先の感覚が鋭くなったように感じる。

(へっ、色の薄いピンクの乳輪だったな)

おっぱいを鷲づかみにすると、指の間から柔らかな肉があふれ、指がそのまま包まれそう。手のひらを返し、乳首を人差し指と中指で挟み乳頭を親指の腹でゆっくりとゆっくりと撫で回す。

あえぎ声を押して殺てはいるが、瑠璃は耐え切れず、体をもぞもぞと動かす。

(くっう、入れてえ、オレのをぶちこみてえ)

「入りたいの？瑠璃のどこに入りたいの」

タイミングのよさに早川はびくつとした。この女、タロット占いで生計立てたというだけあって、妙に感が強い。

(驚くことはないや、こんな状況で入れたくない男がいるかよ)

早川は背中越しにまわした左手でたつぷりとした乳房を乱暴に揉みしだく。瑠璃は堪らず

「あっふふう、いいっ」

と甘ったるくよがり声をあげる。場内を流れるBGMに声はかき消されたと思うが早

川は一瞬われに返って、場内を見渡すと客はまばらでその姿も真つ黒なシルエットになっている。

「瑠璃さんは、俺を馬鹿にしてるんでしょ」

「ええ？ どういうことお」

「こんなとこで、入れたり出したりする度胸がないって馬鹿にしてるんでしょ」

瑠璃の右手を取って自分の股間にリードする。

「うふふつ、これよこれ、入れたいのね」

そこには人並みのサイズながら強く引き締まった欲望の肉柱がすでに屹立していたのだ。瑠璃の指が充血した雁を持て遊ぶ。裏筋を、亀頭の粘膜を……。

ズクン、ズクンと血液が集中し堅く勃起している亀頭の鈴口を、柔らかな瑠璃の指先が翹った。

「ふふつ濡れてる。慧ちゃんのさきつぽ」

「だからあ入れたくって泣いてるんですよ」

リクライニングシートに後ろを向いて瑠璃が横たわる。真似して同じように早川も横たわり、シートの間の肘掛を上にあげると、そこにフレアスカートに包まれた豊満なお尻があった。

スカートがシルと絹ずれの音を立ててたくし上げられた。いきなり、白いふくらとした生尻だ。ショーツもなにもない、美味しそうな臀部に早川は気がはやる。お尻の割れ目に沿って右手を奥に進ませると、とろけそうなあえぎ声を小さくたてて、左を下にして横たわった姿勢のまま、瑠璃は右足を自分の腹の方へ引き寄せてた。

と早川の指は会陰をなでてぽっこりとしたふくらみに到達した。そのふくらみに触れたとたん、ゆっくりと大陰唇は口を開き、濡れそぼった花びらが露出した。その花びらを根元にある敏感な突起を……

「いいから、いいから、中にい 早く……」

振り返って瑠璃が訴える。思い切って人差し指を一気に花びらにつきたてた。ぐぬ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。……。

（あああああ、すげえよ瑠璃さん。びちよびちよじゃん）

小陰唇を開くつもりだったのがそのまま、早川の指は恥穴にしずんだ。膣壁の襞が生き物のようにうにゆうにゅと蠢いて、指を溶かさんばかりだ。

ヌリ。ユ。ヌリ。ユ。蜜壺は暖かく、とろとろにとろけ濃い欲汁が指の動きに音を立てる。

「くふああ、いいつ、もつと……」

豊満な白いお尻がシートの座面の上で堪え切れず、おねだりするようにくねくねうね

プラネタリウム館の場内が明るく前に、瑠璃は「先に出るわね」と席を離れた。そのほうが二人一緒のところを見られる心配がなく早川にとっても好都合なのだが、ちよつとそっけない。

いつもそうなのだ。こちらから陸名瑠璃に連絡をして会えたためしがない。なのに瑠璃は今日のように、時間もかまわず電話を入れる。もちろん、その誘惑に早川が抗えるはずもなく人目を気にしながら、濃い時間を共有するのだ。

（なすがままか、どう言うことだろう？）

瑠璃は激しく肉欲をぶっつけあうと必ず、何かしらの、その時は意味不明な言葉を発する。それを早川はお告げと呼んでいた。そのお告げを実行すれば、必ずいい方向へ事態が転がるのは実証済みだった。新しい女をその日のうちに頂いたことも、仕事の思いがけないピントになったこともある。

「なすがまま……」

早川は意味を噛みしめるように呟いた。このお告げがまた、早川を思いもよらぬ快樂の深遠へと誘うことになるのだ。

ヒサミツビルに戻った早川はエレベータを使わず、二階のショールームまでエスカレーターでいった。ショールームはヒサミツブランドの展示と知育関連の体験コーナーがスペースを占めている。楕円の受付カウンターは常時三名の受付嬢が配置され、自社とショールームの受付を兼ねていた。

エスカレーターを降りて、受付を覗き見しようと、直進せず廊下を迂回する。目の前に、ブルーを基調の制服に身を包んだ受付嬢の後姿があった。艶やかな黒髪が揺れる。恐ろしくスタイルがいい。これほどのプロポーションの持ち主は他にはいない。早川は迷わず、駆け寄り、肩を抱く。

「美穂ちゃん」

「あっ早川さん、びっくりした」

可憐としか言いようがない。額にかかるレイヤの入った前髪、弓形の眉、切れ長の涼やかな瞳、そして、小さめの、輪郭のはっきりした唇。顎の線がキュツと締まって端正な顔立ちだ。

ヒサミツ人気ナンバーワンの浅尾美穂だ。すばやく美穂の髪を掻き分け、やはり唇と同

じょうにくつきりとした形の耳に口づけする。ピクツと美穂がふるえて、拳を作くって抗議する。

「もお、仕事ですよ。早川さん」

「いつ、ねえ、いつ、今度のデートは？金曜どう？」

耳が性感帯なのだ。そのことを知ったのは前回の「L」瑠璃のお告げだった。おかげで何度目かのデート中に抱きしめ、耳にキスし、もう一歩で落とせるトコまでこぎつけたのだった。

スレンダーな印象とは違い、抱きしめると服の上からでも、胸のふくらみからウエストのくびれ、ヒップの丸みが素晴らしいことを早川はもう知っている。

「うーん、あつ早く戻らないと。ごめんなさい。ではその件は後ほどご連絡いたします」

いたづらっぽく、肩をすくめて美穂は小走りで業務に戻っていった。

ナンバーワンを抱く。清楚な制服に包まれた、美穂の裸体を思っただけで、精を放ったばかりだと言うのに、早川はまだなにやら下半身がむずむずしてくるのだった。

デスク五つばかりのブースに戻って、PCを立ち上げる。起動する前に隣のブースの杉山が首を伸ばして、早川慧に声をかけた。

「主任が呼びだよ」

「また、説教かよー」

「……」

黙って杉山は首を引っ込める。無口なくせに結構女には不自由してないようだから不思議な男だ。

（なんだろう）

早川は首をひねった。行動力ありすぎの優華は文句があれば呼びつけるより自分から本人のところに飛んできて、発破をかけるのが常だったからだ。

加賀優華主任のテーブルの前に立つと、主任はA4で二十枚ほどの企画書に目をとおしている。手にしているのが自分の企画書であることよりも、川は主任の胸元に目が釘付けになった。

主任にしては珍しいカットソーの黒のワンピースなのだが、襟ぐりが大胆にあいての。乳房が左右からせめぎ合って、ぶっつきりくつきりと一本谷間の線を形作っている。

すっと美しい動作でわが社の最上級万年筆エグゼクティブ64を手に取り、手帳に何か書きこむ。優華はアナログ手帳と万年筆の愛用者なのだ。

「早川、今晚、和善部長に根回ししときたいの。付き合いなさい」

「はっ？部長こちらにお見えで……あっ！ということは」

「早川の企画、悪くない。インクカートリッジの容量を少なくするということは、液漏れ対策としては有効よ」

（もしかして、オレって初めて主任に認められてる？）

「いやあ、発想の転換といえますかー」

「いい気にならないで。カートリッジの種類を増やすことがどれだけ茅ヶ崎の反発を招くかわかってるの、企画会議で絶対拒否されるわ」

茅ヶ崎というのはヒサミツの万年筆とインク専用の工場のことだ。製造だけでなく、設計開発、研究部門もあわせて同じ敷地内にある。

低価格な万年筆の企画立ち上げが今の優華グループの懸案である。軸のコストを抑えろと、液漏れがおきやすくなる。インクカートリッジの容量をマイクロ単位でも減らして、インクを消費することで出来る空の空間自体を減らし、気圧の変化による影響を減らして液漏れを防ごうというのが早川の企画書のキモだった。

ただし、ニュータイプのインクカートリッジの開発、設計は和善義孝が牛耳る設計開発部が担当することになる。和善部長が低価格の万年筆のために人員を割きたくないのは容易に想像できた。

3

まだ宵の口だ。新橋駅から首都高の下をくぐって並木通りに入ったあたり、こじんまりとしたビルの四階にクラブ「カトレア」があった。

カウンター席には常連が数名。奥のテーブルの壁側にちんまりと腰を下ろしているのが和善部長だ。痩身で背も低く、スーツもモノは悪くないはずだ。部長が着ると安物に見える。頬はこけ、いまだき珍しい大きな目の黒ぶちの眼鏡をかけている。

一言で言えば貧相なのだが、それでも、ヒサミツの文具にかんしては社内でも有数の実力者なのだ。両脇をホステスに囲まれ上機嫌、というわけでもない。

「どうせ、おれはツマラン男さ。あんたらさーわかるか？出張から帰ると誰もいないんだ。書置きすらない。女房のサインとはんこ押した離婚届があるだけだ」

「それは……失礼ですけど奥様には部長のよさがわからなかったのですわ」

前の席の加賀優華主任がフォローを入れるが、いつも自信あふれる優華にしてはありふれた台詞で歯切れが悪い。

「優華、言ってみろよ、俺のよさってなんだ？」

（優華？はあ？いきなり呼び捨てかよ）

優華の横に座った早川はただ、部長の前に小さくなっている。

「部長さんはどんなジャンルの歌好まれます？」

ホステスが話題を変えようと、マイクを持った。

「いいから、君達は向こうにいったなさい」

とそのまま部長は押し黙った。

優華は目で、下がるように合図し、カクテルを注文する。

「気に入らないな、優華はずるいと思わないか」

「何かお気に触ることも」

と優華。

「何故インクカートリッジから見直す？」

「そつそれはですね、低価格の万年筆という戦略的新製品へのクレームが出るケースを可能な限り低く抑える必要があると考えまして……」

早川がこのクラブへ来る前に社内で説明した内容を繰り返す。

「その、企画を通したいわけだ。じゃ何故、ホステスなんか使わないで優華が直接、私を懐柔しないんだ？」

部長の生気のない目が始めて輝いたと思ったら、その視線は露骨に主任の遠慮なく、張り出した見事な胸の隆起にそそがれた。

促されるままに、優華は部長の横に座わった。すばやく部長の手は当然のように優華の腰に回されている。

「優華、いい気になってんじゃねえぞ。あまりの美貌に他の連中は恐れいって手も出せないそうだな、おりや違うよ。女なんて、皆同じだあ」

ぐいつと抱き寄せた弾みで、優華のあわせていた両膝がわれ、前に座る早川の目に太もも、そしてその奥の白いデルタ、パンティが焼きついた。

深夜一時、タクシーに乗り込む和善部長の姿があった。

「はははっ楽しかったよ。優華くあんたの熱意はよくわかった」

ろれつが怪しい部長を乗せて、タクシーは走り出す。その後ろで優華と早川は礼をしている。

ガシッ！

振り向きざま優華は街路樹にけりを入れた。まさか格闘技の経験はないだろうに、腰の入った見事なけりで街路樹の樹皮が剥けている。無理もない。ねちねちとあの部長にお尻を撫で回され、何度が胸ももまれ、ついさっきは階段でよろけたふりをして部長はキスしようとしたのだ。

「あれが脂ぎった中年親父だったら、うまくあしらえたのに、うじうじと惨めったらしく泣き言を言いながら触ってくるんだもの。キモくてもう……見てっ……！」

優華が七分の袖をめくり、早川に突き出す。鳥肌が立っていた。

「すいません主任、何も役に立たなくて……オレ、悔しかったです」

そうなのだ。自分の理想の女が辱められたのだ。いつも自分を散々にこき下ろす上司が、もっと上の権力者にいじめられている。それなのにいい気味だとは思えない。むしろ怒りがこみあげたのだ。

（触るんじゃない。その女はオレが必ず奪ってやる女だ）

早川は、つくづく優華に惚れているんだなと改めて自覚した。

「早川になんか何も期待してないわよ。どこかで飲み直す？」

「ええっホントですか。喜んで」

「と……」

魅惑的な優華のぼってりとした紅い唇が微笑む。次に発した言葉に早川は耳を疑った。

「私のマンシヨンはどう？月島のほうだけど」

第二章 美人上司はアヌが大好き？

1

「マジかよ」

早川は声に出して呟く。高層マンションの一室でシャワーと使っているのだ。

「大事なトコ、キレイにできてね」

確かに優華はそうだった。

「マジかよ」

もう一度声に出して早川はボディシャンプーをたっぷりつけ、期待ですでに半立ち状態の肉棒を「しごと」と洗った。

（やれる、やれるんだ。あの極上ボディをいきなり抱けるんだ、ウホホホッ）

このシチュエーションでそう思わない男はいない。早川はあまりの幸運に卒倒しそうだった。

「テレビでも見てて、私もキレイにしてくる」

優華にわたされたバスローブをはおった早川にそっくり残して優華もバスルームに消えた。部屋数は少ないのだがリビングは広い。大きな液晶テレビから洋画が流れている。フロアリングにナスカの地上絵をモチーフにしたカーペットが敷かれ、インテリアもさっぱりとしたデザインで統一されている。

「夢か。信じられん」

床にすわりこんで、洋画をただ見ているだけで内容は早川の頭にはいつていかない。

――なすがまま――

不意に早川の脳裏に陸名瑠璃のプラネタリウム館でのお告げが甦る。

「????」

洋画が頭に入っていないはずだ。吹き替え版じゃなく英語でしゃべっていることによく、早川は気づいた。字幕もないようだ。何の映画だろう。ローマ戦士のようなコスチュームの若く逞しい男が二人……抱き合って……？

「何じゃこりゃー！」

欧米人のペニスは巨大ではあるがフィヤチンだ、というのは嘘なのか、ピンと堅くカマを持ち上げた見事なペニスを癖毛のローマ戦士が口いっぱい頬張る。

「オウ、オウ」とわざとらしいほどにロンゲが眉間にしわを寄せてよがり始めた。

「おいおいおい、ホモビデオかぁ、こりゃ」

二人ともかなりの美形で、画質も悪くない。ロンゲが受けかと思ったら、癖毛が仰向けに寝て自分の足首を掴み高く上げる。

（やるのか？入るのか、あんなでかいのが）

早川はゲイ趣味はなく、アナルセックスも試したことはないが、珍しいショーを見るように一点に見入った。

巨大なペニスと癖毛のアヌスに突き立てられ、ロンゲが腰を沈めるにつれ、ヌプリヌプリとアヌスに飲み込まれていく。出演者の二人が美形の白人であることもあり、隠微というよりキレイな印象で早川は見とれてしまった。

憧れの上司のマンションでホモビデオを見ているという状況を疑問に思うまで一瞬の間があった。

「なんで……こんな映像を主任が」

後ろから優華の声がかかる。

「キレイよね」

いつもは冷たいアルトボイスが微熱を帯びているようにセクシーだ。

2

振り返るとピッタリとした真つ赤なタンクトップとショートパンツをまとった優華が目を見えさせている。ナイティというには派手な色使いだ。短めのタンクトップから形の良い臍が丸見えだった。むき出しの引き締まった太腿、見事な腰のカーブ、想像以上に飛び出したバストラインに早川の心臓はバクバクと高鳴った。

「主任は……こういうの好きなんですか？いやびっくりしたなー、はははっ」

「おまえこそ見入ってたじゃないの。あれえ、おかしいんじゃない？」

後ろに座り込んだ優華は、ためらいもなく早川のバスローブの上から、股間をまさぐる。早川は優華の体温を背中に感じる。女の熱い息が首筋にかかった。

「主任のせいですよ、堅くなってるのは。ホモビデオのせいじゃない」

「どうでもいいの。お願い、いいでしょ。こうせずにはいられないの。お願い」

優華の危険なおっぱいがずしりと背中に密着した。早川の背中にしなだれかかって、両

腕で早川を包み込む。早川は眩暈を覚えた。

「主任、おれは前から主任のことを」

「だまって、じっとしてて」

後ろから、早川のバスローブをゆっくり剥いでいく。むき出しになった背中を優華のウエーブした髪のがなでていく。髪の中から快楽の電流でも流れているのかと思うほど、一撫でされるごとに、たまらない気分になって声がでそうになる。

「男の癖に感じやすいのね」

早川の上半身がむき出しになった。優華の大きな瞳が妖しく淫靡に光る。

「好きなの。わかって」

「主任！おれだって」

早川が抱きしめようとした瞬間、ガチャツと乾いた金属の音がした。

「しゅ主任！っ、何ですかこりゃ？はずしてくださいよ！」

早川の両手には冷たい感触の手錠が掛けられていたのだ。優華はいきなり両手で、立ちかけた早川を突き飛ばした。早川はバランスを失い床に転がる。脱ぎかけのバスローブがはだけて、ブルーのストライプのトランクス姿だ。

理解不能！早川は声を失った。

モノクロ基調のリビング。上半身裸で手錠をかけられカーペットに転がる早川。ピッタリとした短目のタンクトップとショートパンツがことさら、優華のダイナミックなボディを強調する。

ディスプレイからは絶え間なく男のあえぎ声が流れてくる。まるでスポーツのように逞しい男のアヌスにズコンズコンと巨大なペニスが叩きこまれている。

「好きなのよ。たまらないの！男が犯されて感じる姿を見るのが！」

そう叫ぶと、すばやいモーションから早川の背中に隠し持っていた鞭を振り下ろす。

十本ほどの細い紐皮の一方をあわせグリップをつけたバラ鞭だ。ビシバシと派手な音が響く。

「いい加減にしてください！主任！」

叫ぶ早川の脳裏に雷鳴のように熟女陸名瑠璃の声が再び響いた。

——なすがまま——

（あつこれか、このことか、なすがままになれというのか？）

一瞬、冷静になった早川の目に、頬を紅潮させ、キラキラと瞳を燃え上がらせて、ババーンと張ったおっぱいを震わせながら鞭を振るう優華のその姿はさながら戦う女神のように美しい。



「許しを乞いなさい。早川。いつもいい目であたしの胸元ばかり見つめて」「いや、それは……しょうがないですよ。そんなすごいバスト、嫌でも目がいきますよ」「お黙り！このスケベ、どーせおまえも和善部長みたいに、うじうじとセクハラするに決まってる」

ピシッ、ピシッと小気味いい音を立てて、バラ鞭が早川の背中に、お尻に、太ももに炸裂する。早川は痛がって見せるが、実は音ほど痛くはない。

（主任、さっきの鬱屈した気持ちをおれにぶっつけてくれているんだ）

そう思うと早川は、むしろ、優華へのいい気持ちが強くなるほどだった。鞭を投げ捨て優華は、うずくまっている早川を踏みつける。優華の素足がグリグリと容赦なく背中を押しつづした。

「はああああ……」

「お前、もしかしてマゾ？気持ちいいんだろ？」

「そんな訳ないですよ。もおこのくらいで……」

「うん、止めて欲しいのか？」

（止めて欲しい……くはない。足の裏とはいえ初めて皮膚と皮膚が接触したのだ。その甘美な感触をもっと……）

早川は自分の気持ちに驚いた。

「止めて欲しくないんだろ？このマゾ野郎！だったらもっと感じてもだえて見せるんだ」

いきなりうつぶせの早川のトランクスを下にずり下げる。思わず、叫び声をあげて、逃げようとするが、優華にすかさず押さえ込まれて、お尻を突き出した格好になっってしまう。

お尻に優華の質量のある胸のふくらみを感じた。

「お前、勃起してるじゃない。マゾ男君？」

優華が頭を下げて覗き込む。早川のペニスは弾けんばかりに勃起している。

「触って欲しいの？あれえ、何か透明な液が先から垂れてるよ？」

「……触って欲しい」

「だめだめ、お願いしなきゃ。言えるでしょ。汚らしい早川のちんぽ触ってくださいって」

優華が男の性器の俗称を口にしただけで、早川のペニスはフルフルと興奮にうち震えた。

「……汚らしいオレの……ちんぽ触ってください」

「馬鹿野郎！」

平手打ちが早川の尻たばに派手な音を立てて炸裂する。輝きを増す優華の瞳が獲物を捕らえた野生動物を思わせる。

「お前の汚いちんぽなんか触れるか。もっと気持ちのいいこと特別にしてあげるよ」

優華の手がテーブルの万年筆を取る。その名もエグゼクティブ64。エボナイトの削りだしを漆で仕上げたヒサミツのフラグシップモデルだ。優華愛用の一品でもある。紅い唇に横にして咥え、唾液でその軸をたっぷりと湿らせる。

「大事なトコきれいにしてきた？」

つーつと、優華のしなやかな指先が迷うことなく、持ち上げられた早川のお尻の中心、アヌスにふれる。

「あひやああ、ななっなにを、まままっ待って！」

早川はまるで女がバックから犯されるように、尻を持ち上げ肩を床につけている。優華はその横に、早川の尻の方に体を向けて座っている。左の脇で早川の腰を押さえつけ、右手でアヌスを弄んでいるのだ。

3

指が括約筋の周りとゆっくりと揉み解す。

（なに、主任が、おれの、あああつ、あふっ）

「そうよ、もっと感じて。ああ、たまらないのその顔」

ふわっと優華の香りがただよい、早川を一層興奮させる。エグゼクティブ64を右手でもち今度は左の手で、早川のアヌスを広げエグゼクティブ64の軸尻を当てた。

恍惚とした表情の優華、その半開きの口から涎れがツーと落ちるとそれは軸尻とアヌスにからみついた。

「ああ、早川、お尻でちゃんと感じるのよ」

というなり、少しの抵抗を見せてエグゼクティブ64はアヌスに飲み込まれる。

（主任にケツの穴を見られ、いじくられ、広げられ、万年筆をぶち込まれている。なんなんだ、この状況は？）

早川は信じられなかった。もつと信じられないのは、優華がエグゼクティブ64を微妙に操るたびに、味わったことのないじれったいような、熱くうずく快感が断続的に押し寄せてくることだ。

そのだびに早川は恥も外聞もなく尻を振って、切ないあえぎ声をあげてしまう。

（もうもう、なすがままだ……）